

具体美術協会が求めた児童の美的表現に関する研究

(要約)

広島大学大学院 人間社会科学研究科
博士課程後期 人文社会科学専攻
人文学プログラム

学籍番号：氏名：金山和彦

(論文目次)

序論

1 研究背景と主たる先行研究

2 本論文の構成

第1章 国内における具体の評価と児童美術への憧れ

第2章 吉原治良の作品にみる児童観

第3章 具体作家の作品にみる児童観

3-1 村上三郎

3-2 児童とのつながりによって成立する作品

3-3 白髪一雄

3-4 堀尾貞治

第4章 具体による児童美術へのアプローチ

4-1 《童美展》

4-2 童詩雑誌『きりん』

第5章 アンフォルメル期におけるミッシェル・タピエの思想

第6章 アンフォルメルの指導者タピエが求めたニーチェの思想

第7章 具体が求めた児童の美的表現と描画発達段階

終章

1 研究成果の概要

2 本論文各章における研究成果のまとめ

(論文の概要)

本論文は、戦後日本において、前衛的な抽象芸術を広めた吉原治良(1905～1972)を会長とする具体美術協会(以下、具体)の会員がおこなった「児童への造形指導」に焦点を当て、彼らが児童美術に見出した新しい美的表現の形を、実践の分析ならびに背景となる思想の考察を通して浮き彫りにしたものである。

序論では、具体に関わる先行研究を分析し、それらの研究には、具体が児童に提供する作品や実践の解析、具体作家が審査をした幼児の造形展や童詩雑誌と具体が発刊した機関誌との関係分析、具体作家への聞き取り調査を通じた実態把握、そして児童の発達概念や具体の思想に関する考察が欠如していることを明らかにし、内容を補った。主たる先行研究は、以下のものである。

(1)加藤(2008)『童美展 1948-2008』芦屋市立美術博物館、(2)山本淳夫(2002)「『きりん』と吉原治良一深江小学校 橋本学級を中心に」『吉原治良研究論集』財団法人ポーラ美術振興財団、吉原治良研究会、(3)山本淳夫(2014)「《泥にいどむ》と初期『具体』の作品構造—『アール・ブリュット』と『童美展』

の比較を通じて一『兵庫県立美術館研究紀要』第8号、兵庫県立美術館、(4)鈴木慈子(2021)『『具体』以前の吉原治良』『民族藝術』民族藝術学会 VOL. 28、(5)安田早苗(2022)『『具体』が子どもの美術を参照した理由についての一考察』『和光大学表現学部紀要』22号。これらの観点を補い、「具体と児童美術の関係性」を美術と思想の両方面から総合的に描き出すことを本論でめざした。

第1章では、具体の成立過程と国内外の評価を明らかにした。具体が日本の前衛美術としての地位を得るために手がけた戦略として、1954年機関誌『具体』の発刊、1956年具体美術宣言の発表、1955年・1956年にかけての野外や舞台等を使用した表現作品があげられる。この戦略の結果、具体は海外からの高い評価を手に入れるが、国内では、流行を先取りする具体の特異な作風は、従来の評価基準に馴染まず、評価対象から外された。加えて、前衛芸術の方向とは別に、具体が憧れ重視した児童美術の視点にも触れ、具体が児童美術という新しい美術領域を萌芽的に開拓したことに言及した。

第2章においては、具体のリーダー吉原治良の八つの時期(第1期1923~1929年「魚の時代」、第2期1930~1934年「シュルレアリスムのイメージの時代」、第3期1934~1946年「初期抽象の時代」、第4期1946~1948年「顔の時代」、第5期1948~1950年「鳥と人の時代」、第6期1950~1954年「線的抽象の時代」、第7期1955~1965年「アンフォルメル」の時代、第8期1965~1972年「円の時代」)にわたる画風の変遷について考察した。その結果、児童美術に関して、絵本『スイゾクカン』(1932)や顔の時代の《花と子供たち》(1947)をはじめ、全時期を通じて吉原の関心は継続され、それが彼の代表作品《白い円》(1967)等の「円の作品」への下地となっていることを明らかにした。

第3章では、代表的な具体作家(村上三郎、白髪一雄、堀尾貞治)の作品と児童美術との関係を解明した。村上三郎(1925-1996)は、幼稚園での40年間の造形指導を行いつつ児童の活動を自らの作品に取り込み、白髪一雄(1924-2008)は、自己の幼児期の体験や児童美術から受けた影響によって無意識や身体感覚を通じた純粋な行為こそが真の表現につながるという立場に至り、堀尾貞治(1939-2018)は、子どもとともに遊びこむインクルーシブなワークショップを通じて「無償性」や「空間・行為の共有」を芸術的に追求した。本章の課題を解明するために、具体主催のワークショップへの参加・観察、さらには元具体会員へのインタビュー調査を行い、それらを通して各具体作家の児童観を描出した。

第4章では、具体の吉原らが、1948年に主催・審査した国内初の児童創作美術展である《童美展》ならびに同年に発刊され具体会員も関わった童詩雑誌『きりん』と、具体作家との関わりを明らかにした。《童美展》は、国内初の児童創作美術展《阪神童画展覧会》の後継と位置付けられ、両美術展は吉原を代表とする具体会員たちが審査にあたっていた。そこでは描画に至る前の、幼児の純粋な感性に基づくダイナミックなイメージの表現が評価された。『きりん』の分析については、元具体会員の浮田要三(1924-2013)の協力を得て、具体会員が作成したすべてのカット、挿絵、表紙絵、お話を年代順に整理し、その内容から、具体が提供した教育内容を明確にした。

第5章においては、具体をリードした吉原らに最も影響を与えたミッシェル・タピエ(Michel Tapié de Céleyran 1909-1987)提唱のアンフォルメル運動の美術表現上の意義を明らかにした。アンフォルメル運動とは、第二次大戦後にヨーロッパから広がった「未定形な生の躍動」を支持する表現主義的な抽象芸術運動をさす。タピエは、アンフォルメル運動の啓蒙のために1957年来日し、興味を示す吉原をはじめとする国内の芸術家や批評家らと議論を交えた。本章の考察を通して、アンフォルメルをめぐるタピエの解釈と、吉原率いる具体が目指した新しい美的表現との合流点を導き出した。

第6章では、アンフォルメル研究で従来フォーカスされていない「タピエが求めるニーチェの遊戯論」について考察した。実際、タピエは、自らの芸術理念の基盤にドイツの哲学者ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900)の思想を置く。本章では、この点に注目し、タピエ

アンフォルメルーニーチェー具体の児童観を理論的につなぐことを試みた。その結果、タピエが、ニーチェの著書『悲劇の誕生 *Die Geburt der Tragödie*』(1872)の「芸術論」や、『ツァラトゥストラはかく語りき *Also sprach Zarathustra*』(1883-1885)の「精神の三変容(駱駝—獅子—子ども)」に示される「子どもの無垢な遊戯」にみる超人論に着目していたことと、主導するアンフォルメル運動がニーチェ的な「未定形な生の躍動」を運動の原理に置くことが見出された。さらに、吉原をはじめとする具体作家はいずれも、芸術表現の原初形態を児童の絵画に求めており、そこに純化された「未分化な生の躍動」を見ていることが確認された。本章では、そうした児童の美的表現の生成という観点に立ち、タピエを交点とし、アンフォルメル、ニーチェの遊戯論、具体の児童観を架橋する構造を描き出した。

第7章では、これまで明らかにした児童の美的表現の生成過程が、どの発達段階で有効に機能し得るのかを描画発達段階に照らして位置づけた。取り上げた児童の造形発達論は、H. リード (Sir Herbert Edward Read 1893-1968)『芸術による教育』(1959)、V. ローエンフェルド (Viktor Lowenfeld 1903-1960)『美術による人間形成—創造的発達と精神的成長』(1963)、R. ケロググ (Rhoda Kellogg 1898-1987)『児童画の発達過程—なぐり描きからピクチャアへ』(1971)、文部省『幼稚園教育指導書・領域編 絵画製作』(1970)であり、それらを比較分析し、具体が求める児童の美的表現と描画発達段階との対応を検討した。その結果、具体は、発達の根源的な基底に「未分化」「没我」「虚無」を見、そこに児童の特質が位置づくものと考え、その発達段階から生み出される美的表現の意義を強調することが判明した。

終章では、本論の考察を通じた研究成果の概要を各章ごとにまとめて記述した。

本研究を振り返り、研究の方法と内容のオリジナルな観点を挙げておく。まず、研究の方法としては、基本的には文献研究に基づき進めたが、従来、具体研究において十分に示されなかった描画発達段階に準じた研究に加え、具体会員と直接対面したヒアリング調査やワークショップへの参加・観察をもあわせておこなった。とりわけ、後者の調査は、言説資料にはない具体作家のリアルな見解を浮き彫りにし、今後の具体研究にとって貴重な資料となるものと思われる。

(論文の独創的視点)

(1)「具体と児童美術の関係性」を、作家の幼少期の回想等の言説、児童をモチーフとした作品、児童への造形指導の方法と内容、具体作家への質問調査、等の観点から総合的に考察したこと。

(2) 児童創作美術展である《童美展》ならびに童詩雑誌『きりん』と、具体作家との実際的な関わりを明らかにしたこと。

(3)「児童の美的表現の生成」という観点に立ち、タピエの思想とアンフォルメル運動とニーチェの遊戯理論と具体作家による児童美術の理念・実践を関連付けたこと。

(4) 児童の美的表現が、発達段階のどの部分で有効に機能し得るのかを描画発達段階に照らして位置づけたこと、ならびに「未分化」「没我」「虚無」を特徴とする児童から生み出される美的表現の意義を浮き彫りにしたこと。

(5) 美術史思想研究として、近代日本の美術界をリードした具体に関する思想や実践を含む資料を網羅的に読み解き、多くの関係者へのインタビューをふまえ当協会の全体像を描き出し、思想面を含め児童美術との関係を明確にしたこと。

以上の研究の結果、本研究の課題「具体美術協会が求めた児童の美的表現」について、吉原を中心とする具体会員の理論と実践、その影響としてのタピエのアンフォルメルやニーチェ思想との関係や、児童の描画発達段階の観点から可能な限り構造的に描出した。